

蒙談



第 30 号

蒙 談 会 発 行

山口大神宮創建の謎

―北辰祭祀との関係について―

柴 田 眼 治

山口大神宮の由緒は社務所発行の小冊子に次の通り記載されている。

『山口大神宮は伊勢大神宮（三重県伊勢市）のご分霊を勧請したお宮で、古くより「西のお伊勢さま」と呼ばれ西国では広く信仰されている神社である。

当宮を勧請したのは、当地の領主で足利幕府の管領代を勤めた大内氏第三十代の当主大内義興で、第百四代後柏原天皇の勅許を得て永正十五年（一五一八）十一月宮地を高嶺東麓山紫水明の地（現在地）を選んで社殿の創建に着手、翌十六年十一月内宮を、十七年四月には外宮を建立し、同年六月二十九日に鎮座祭を行った。



山口大神宮参道

大内時代はつきあたりの上に内宮・外宮が建っていた。

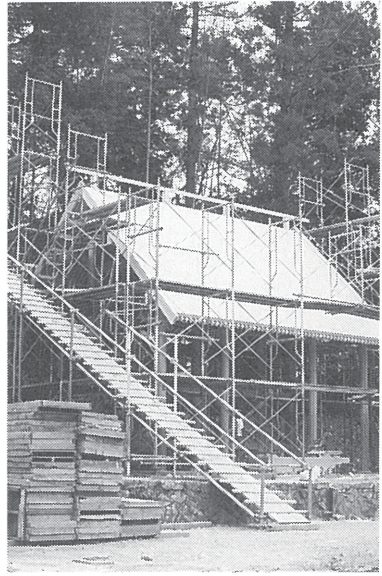
当初は社号を「鴻嶺大神宮」、後陽成天皇から「伊勢」の勅額を賜ってからは「高嶺大神宮」とか「山口伊勢」「山口今伊勢」とか称せられていた。

昭和三年十月社格を県社とし「高嶺神社」と称する

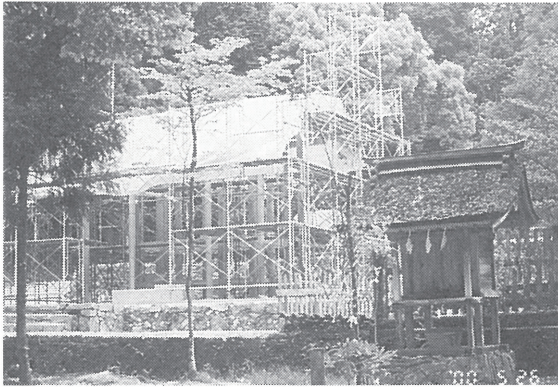
こととなったが、昭和二十二年七月現在の「山口大神宮」と改称した。

当宮の内宮・外宮は伊勢大神宮にならって二十年目ごとに造り替えることとなっており、現社殿は昭和三十一年に造営したものである。』

内宮は平成七年十月十二日に惜しくも焼失した。その後、関係者の努力で平成の式年遷宮が行われることとなった。現在、広く浄財を募り造営の工事が行われていて平成十二年秋の完成を目指している。さて大内義興の勸請創建が後柏原天皇の勅許を得ることができ



式年遷宮に向け造営中の内宮



造営中の山口大神宮外宮

たのは何故であろうか。失脚した足利義植を奉じて上洛した義興はその後、管領代に任命され、天下に比類のない武人として勢威を張った。また彼が在京中に雪の比叡山を望んで詠んだ「かくばかり遠き吾妻の不二がねを今ぞ都の雪のあけぼの」の歌は後柏原天皇をはじめ列席の公卿達の激賞と答歌をうけた。文人として

も義興は殿中に華々しく登場した。文武両道を兼ね備えた勇将の神宮勧請の願いを天皇は嘉みせられたのであろう。又、彼の財力も大きな力となったと考えられる。しかし皇室の祖神である大神の分霊は他に例のないことである。如何に敬神の念篤く、権勢を有したとは云え、容易に勅許は得がたいのではないだろうか。さて大内氏の氏神は北辰妙見である。伊勢神宮と北辰祭祀についての興味深い論文がある。民俗学者で学習院女子短大教授の吉野裕子著「易と日本の祭祀」や「隠された神々」（いづれも人文書院刊）から以下、引用させて頂く。

『第二次大戦迄の平均的日本人の一日は、神棚と仏壇にそれぞれ供物をする事に始まった。神棚には水・洗米・塩、仏壇には炊き立てのご飯とお茶である。それは人間の延長線上の生命体として神仏を捉えている証拠で、当然、そこには自分らの先祖の霊も重ね合わされる。

日本人にとっては何を借^おいても神仏に食事を供する

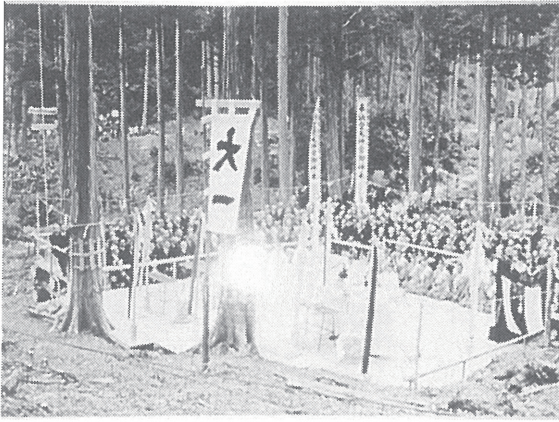
ことが先決。この即物的行為は、神仏に対する報恩感謝、授福祈願、罪障懺悔等、抽象的なものに優先する。このような個々の家の祭りの原型は当然、国家の祭祀にみられ、遠く天武朝確立と推測される日本の祭りの双壁、「大嘗祭」と「伊勢神宮祭祀」においても、その根本理念は、

「神膳之供進第一之大事也。秘事也。」（「宮主秘事口伝」）
ということの一語につきるのである。

この供饌をうけることはもちろんその祭りの祭神であるが、ふしぎなことに大嘗祭のこの祭神が如何なる神であるかは古来、明らかではない。その謎を解く鍵が「天皇」の呼称である。

古代中国哲学では北天にあつて、不動の北極星が宇宙の中心として捉えられた。併せてその周囲を規則正しく廻る北斗七星は、農耕の目安として穀物神、その天の大七^{おおさち}としての形は食物神、或いは車の形からは天帝の乗車として想像され、北極星と北斗七星は相即分離の關係にあつた。

北極星の神靈化が「太一」、「天照大帝」であるが、推古朝の頃、天皇を名乗った大和の首長は、祖霊の天照大神も自身と同じ宇宙規模レベルにまで高めなければバランスを欠く、という認識から天照大神に太一を習合した。即ち、内宮（皇大神宮）の正北、アラマツリノ宮にひそかに太一を祀ったのである。



伊勢神宮杣始祭における「大一」幟
たいいつ

一方この太一、即ち天照大神への神饌供進者としては、北斗の神靈化、豊受大神を丹波の竹野の里から勧請し、これを外宮に奉斎した。

柄杓型の北斗七星は、いわば天の大匕で、その凹みの中に食物を容れてこそ、それが初めて太一に届く、というのである。

大嘗祭の神饌を、「ユキ・スキ」、伊勢神宮のそれを「宵・暁 大御饌」というが、その名称・祭祀事象等から、それらが北斗経由の神饌であることが推測される。

大嘗祭・伊勢神宮祭祀の祭神は共に、

● 「太一を習合した天照大神」或いは

● 「天照大神を内包する太一」

であるが、この二重性が秘儀として表面から隠されたために一切が霧の中に閉ざされてしまったのである。』

伊勢神宮をつらぬく陰陽五行

『秘紋・尾形文錦の謎』

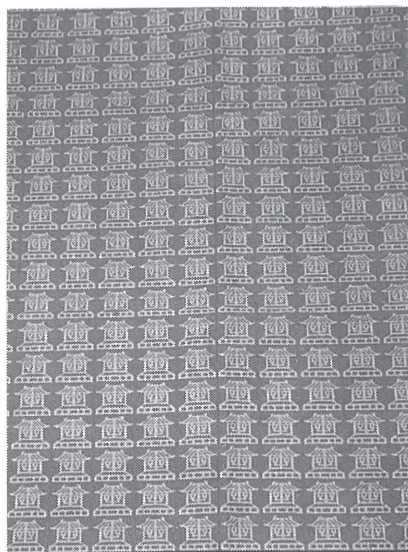
中国古代天文学では天を五つの部分に分け、北極星

を中心とする部分を天の中央という意味で中宮とよんだ。この北極星を神格化したものが「太一」であった。そこで次のことが考えられる。天照大神が「太一」に習合され、伊勢が天帝・太一の支配する天であるとするならば、内宮は当然、その「太一」の居所でもある。

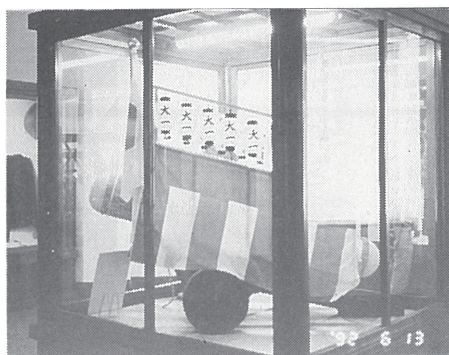
さて皇大神宮には二十年に一度の御遷宮があるが、それには種々の神秘的なご装束がととのえられる。その中でも特別の扱いをされるのが「屋形文錦の御被」である。この御被は衾ふすまともかき、御遷宮の際、み正体を被おおういわば夜着のようなものであるが、それは文字通り屋形つまり家屋が図案化されている錦である。

「荒木田氏経神主が『屋形文錦の御事は肝心の御被なり』と特別の注意をうながしたように、この文様もんようは他のところには決して用いてはならないとされている」（桜井勝之進『伊勢の大神の宮二二三頁』）という門外不出、複製を禁じ使用を許さない図柄である。家屋を描いたにすぎない図柄のこの錦が、なぜあらゆる重要なご装束に先行して、神秘的な扱いをうけなければならないのか。

（筆者撮影）



伊勢内宮秘紋 屋形文錦御被



お木洩祭心の御柱を飾る

「大一」提灯

「大一」は「太一」と同儀

たいいつ

おそらくそれは、その屋形文が「太一」の居所としての内宮を、象徴するからではなからうか。この図柄の屋形の屋根は瓦らしく、両端は反^そつていていかにも中国風であり、「太一」の居所にこそふさわしく、どうみても檜皮葺素木造の正宮の造りようではない。

天照大神と「太一」との習合は、秘事として内宮におけるいつさいの祭祀の表面から隠され、その事実の筆録もさし止められていたが、ただ一つ、この図柄にだけこの習合の事実がうたわれていたのではなからうか。

この内宮の屋形文錦に対して、外宮にはそれと同等の重要さと、同様の用途をもった秘紋・刺車文錦の伝承がある。そうして注目されるのは、

「本宮、屋形文錦を専ら重んじ奉るに^{むか}対へて、外宮には刺車文錦を重んず」(「大神宮儀式解」巻九)

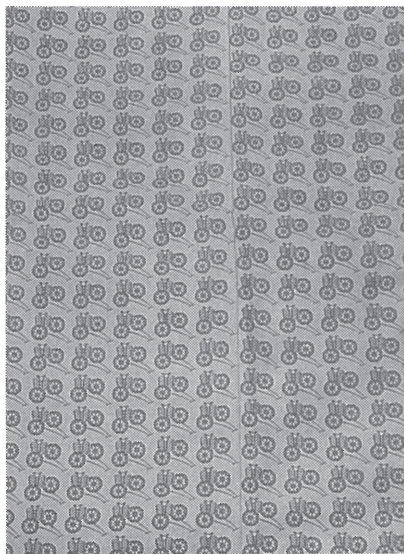
とあるように、外宮の秘紋・刺車文錦は、内宮の屋形文錦に対応するものとして扱われ、この両者の間には密接不可分の関係がみられることである。

秘紋・刺車文の錦をめぐって―北斗七星

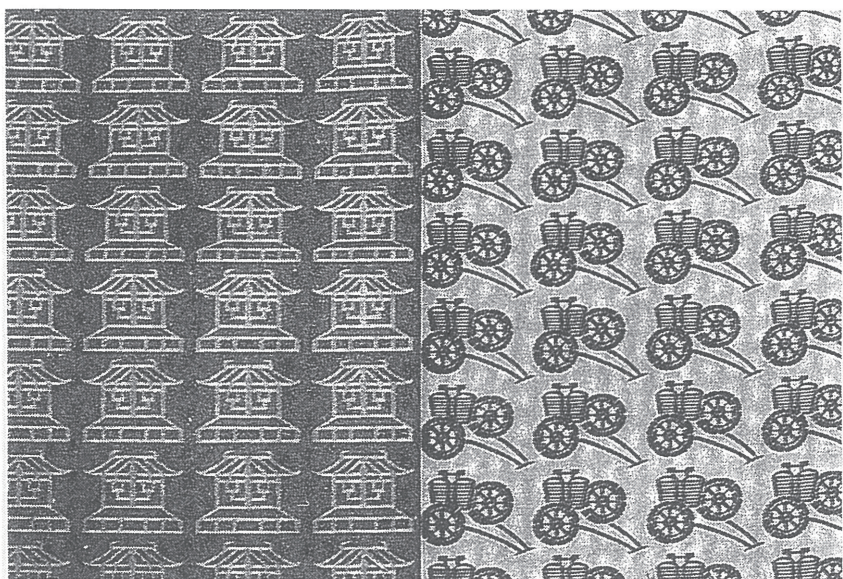
「太一」の居所としての内容を象徴するものが、内宮に伝承される屋形文錦であるならば、外宮に伝承される刺車文錦は何の象徴であらうか。

北斗は北極星を中心にしてまわる星であるが、これは北極星の精・天帝「太一」が乗る車とされている。それならば刺車文は北斗としての外宮の象徴なのではなからうか。(以上「隠された神々より」)

中国の北辰北斗思想が我国に入ってきたのはかなり



外宮秘紋
刺車(小車)文錦御被



伊勢神宮内宮の秘紋・屋形文錦

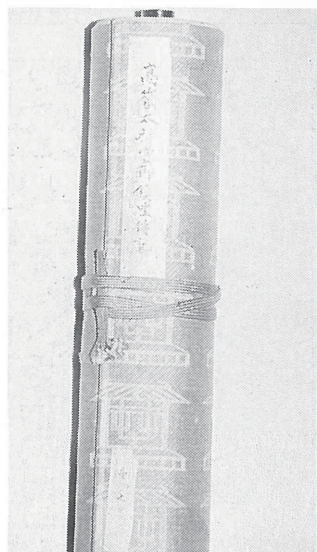
外宮の秘紋・刺車文錦

吉野裕子著「隠された神々」より

古い。推古女帝は初めて天皇と称された。中国道教では北辰又は太一を天皇大帝てんこうと云う。聖徳太子の四天王寺の国宝「北斗七星剣」や平城宮の北闕思想けつによる造営や桓武天皇の枚方の岡での北辰祭祀などに見られる。天帝（北極星）の意を受けた地上の皇帝が臣民を統べるといふ中国の思想である。大内氏も独自に半島経由で移入した北辰祭祀を山口の氷上の地の妙見社の上・下宮で行なっていた。妙見は密教の天尊で天台宗では北辰妙見尊星王と呼び、真言宗では北辰妙見大菩薩と称する。義興は幼名を亀童丸と言った。父の政弘や嫡男の義隆も幼名は亀童丸である。亀童丸の時期にのみ氷上の上宮祭祀を行なうことができたという。北辰玄武のシンボルとしての亀なのである。義興は足利義植を將軍職に復位させた翌年、伊勢神宮へ参拝している。この時に神宮神職や神宮最大の御師高向二頭太夫光定などの関係者に北辰祭祀の秘儀について示唆を受けたのではなからうか。山口大神宮は初めは「高嶺神明」と呼ばれ、創建当時の記録書に「高嶺両大神宮御鎮座



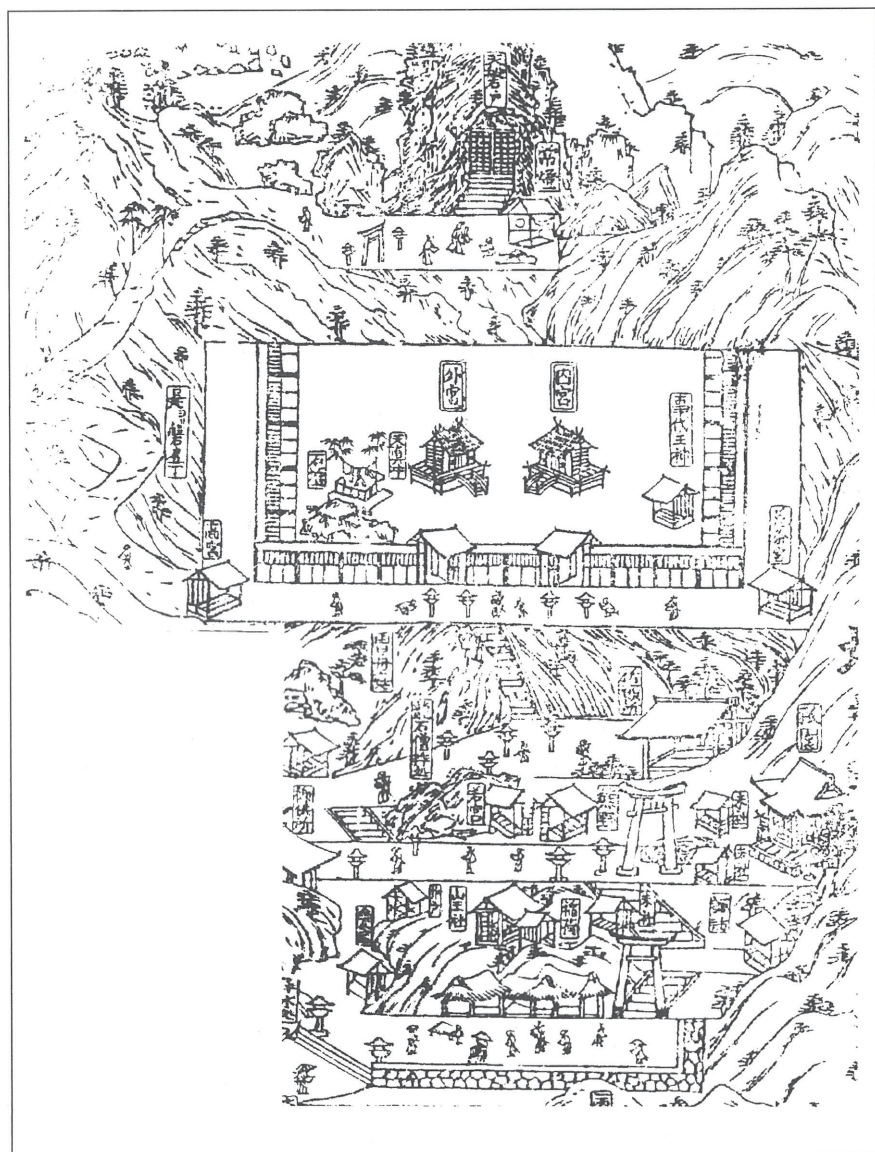
御鎮座伝記卷子
表装の屋形文錦



高嶺両太神宮
御鎮座伝記一卷

伝記」一卷がある。この奥書に「永正十七年閏六月下旬註之」とあるので創建当時のものである。実はこの伝記の巻物の表装は伊勢神宮秘紋「屋形文錦」なのである。山口大神宮の松田良治宮司によれば『この「屋形文」は伊勢神宮と当宮にしか使用を許されていない。』との宮司家の伝承であるそうだ。松田宮司家は内義弘が紀州を領土としていた時に紀州に在した橘諸兄の名流で義弘が堺で戦死した後に山口へ移住し、当社の宮司職を世襲しておられる。二十五代義弘は南北朝合一に際しては周旋の大業を果しているので天朝においても大内家に対しては特別の思召しがあったであろう。義興は大内家の氏神北辰妙見が伊勢神宮に隠された「北辰北斗」と同一と確信して勧請を願ったために、勅許がおりたのではないだろうか。昭和三十五年の式年遷宮の時に奉賛会が発行した「山口大神宮誌」に和歌の名手でもあった近藤清石先生が、明治のある年の秋に大神宮に詣でて詠んだ歌が残っている。

やまつみの みつくとなりは 小車も



山口大神宮古図

内外宮は創建当時は東を向き、大殿館から遥拝できたであろう。
寛文年間、毛利氏の代に現在地に遷された。

屋形もあらぬ錦なりけり

と昔を思い出しながら満山の唐紅の錦を賞でたとある。この歌の中にある屋形は内宮秘紋の屋形文錦と小車おくるまは外宮秘紋の刺車文錦を錦織りなす萬山の紅葉と重ねて詠まれているのではないか。伊勢神宮神宝帳に「刺車文」は別名「小車文」と記してある。現在、山口大神宮に小車文が残っているか不明だが、近藤清石



伊勢内宮荒祭宮

(太一神、北辰が祀られるという)

先生は何かの資料で知って居られたのではなからうか。義興の伊勢勧請をした時期は、中央では南北朝・応仁の乱と続いた永い戦乱で宮中も幕府も衰微し、都は荒廃していた。朝野に伊勢神宮の式年遷宮を行なう力はなかった。内宮は百二十三年、外宮も百二十九年間式年遷宮は行われておらず、この空白期に義興公が山口の地に伊勢大神を勧請して盛大にかつ荘厳に祭祀を執行了のである。天下になり代って天朝の祖神をお祭りし、天下万民の安寧を祈願することとは、管領代としての精神世界の大事業でもあった。「高嶺両大神宮御鎮座伝記」には多くの神々の中に氏神である「北辰妙見大菩薩」も末社に併祀してある。また荒祭宮も造営されており、山口においても北辰と伊勢大神との習合を垣間見ることができるのである。大内氏が創建し、毛利氏も篤く崇敬した山口の文化を大切にしたいものである。